

詩をめぐる対話

現代詩とは？

詩の魅力とは？

平川克美

ひらかわ・かつみ ●1950年東京都大田区生まれ。文筆家。隣町珈琲店主。声と語りのダウンロードサイト「ラジオデイズ」代表。立教大学客員教授。『21世紀の楯田幻想論 その日暮らしの哲学』（ミシマ社）、『移行期の混乱』以後、家族の崩壊と再生（晶文社）など著作多数。

小池昌代

こいけ・まさよ ●1959年東京都江東区生まれ。詩人。小説家。『コルカタ』（思潮社）で萩原朔太郎賞、『ババ、バサラ、サラバ』（本阿弥書店）で小野十三郎賞、『たまもの』（講談社）で泉鏡花文学賞など、詩、小説、エッセイなどでの受賞多数。最新詩集に『野笑』（澤標）がある。

現代詩の歩み

平川 今回、『望星』で現代詩の特集をやることになったのは、僕からの提案でもあって、まあ、軽い気持ちで言い出したんですけど、いざやろうとなったときに、困ったなあ。詩には二十代のころからずっと関心を持っていて、自分で詩作をしていた時期があったりもしたんですが、実質的に詩に触れていた時期はわりと短いんです。

そこで、アドバイザーが必要だとなったときに、これはもう小池さんしかないということで、お声をかけさせていただきました。小池さんとはNHKの「週刊ブックレビュー」という番組がご縁で知り合ったんですが、初めて小池さんの詩を読んだときには、本当に驚いたんです。

小池 ご自身が親しんできた詩とは、ずいぶん違うなあと思われたんですか？

平川 いや、逆に、清水哲男さんの流れをくむ人だと思いました。詩には、知性（批評性）の割合がとても重要で、あまりにも知性的だと情理の「理」だけの言

葉遊びになってしまったり、知性が足りないと感じが強く過ぎてベタついてしまう。その微妙な距離感が、清水哲男さんと非常に近い感じがしたんですね。僕は七〇年代に清水利さんの詩を、ずいぶん共感を持って読んでいたんですけど、いい詩ではあるんですが、どうも息苦しい。それで、兄の清水哲男さんの詩を読んだときに、目の前が開けるといふ体験をした。彼の詩に、助けられたといつてもいい。

小池 そうだったんですか。清水哲男さんの詩にある知性のさじ加減は本当に微妙で魅力的です。

平川 それにしても、今回の話を引き受けてくださるのに、ずいぶん迷われていましたね。メールしても、返事、来ないんだもん（笑）。

小池 私はいま、現代詩の端っこのほうで書いている感じなんです。「詩」に対しては一貫して興味と愛情を持ってきましたが、「現代詩」となると、ある時期から冷やかな距離をもって見るようになりました。自分自身がそこから弾かれている感覚もある。ですから迷いました。

平川 現代詩の中心でやっている人が、別にいるというんですか？

小池 中心もすでに溶解して、周縁部分がひたすら拡大しているともいうのでしょうか。

平川 そこはまた、後でいろいろかきたいんですが、今回の企画のために、いま一度、戦後詩についておさらいしてみたいです。

僕にとつての出発点は、『荒地』という詩誌だったんですが、『荒地』って実は一年もやっていなくて、一九四七年九月から翌四八年の六月までだから、本当に短かった。そのメンバーは、鮎川信夫にせよ、田村隆一にせよ、荒地派としてはやや異色の西脇順三郎にせよ、何かしら背負っているものがある。大きいのは、やはり戦争でしょう。

『荒地』以前だと、四季派なんかがあります。四季派の詩は抒情的で、第一次と第二次があり、堀辰雄、室生犀星、三好達治などが第一次。立原道造や津村信夫は第二次です。さらに前には、日本の伝統への回帰を提唱した日本浪漫主義派がある。これは一つの文学思想ですから、詩に限った話ではないんですが。

戦後になると表現が一気に解放され、詩にとつては幸福な時代が来ます。一九四〇年代から五〇年代には、荒地派のほかにもいろいろな動きが出てきて、たとえ